

合気道は、創始者の植芝盛平（1883-1969 年、和歌山県出身）が日本伝統の武術と精神性を融合させて新たに確立した武道である。以下、その成り立ちから現在までを概説する。

1. 合気道誕生以前

合気道のルーツは、約 1,000 年以上前から会津藩に伝えられた「大東流合気柔術」にある。盛平翁は、幼少期から柔道や剣道など様々な武術を学び、その中で大東流合気柔術の武田惣角に出会い、その奥義を極めた。

2. 合気道の創始

盛平翁は、武術の強さだけでなく、出口王仁三郎が主宰する大本教に入信し、精神的な修行にも励んだ。大本教の教えは、合気道における「和合」の思想の基礎となった。様々な武術と精神性を融合させ、大正末期から昭和初期にかけて独自の武道体系を創り上げ、1942 年に「合気道」と命名した。

3. 合気道の思想と技の特徴

その特徴は、相手との力比べを避け、相手の力を利用して技をかけることにある。相手の攻撃を無理に受け止めず、体の動きや呼吸を調和させて相手を制する「和合」の思想に基づいている。また、単なる護身術ではなく、稽古を通じて心身の鍛錬や人間性の向上を目指す側面も重視している。

4. 合気道の発展

戦後、合気道は盛平翁の弟子たちによって国内外に広められた。1948 年には、合気道の普及・発展を目的とする「合気会」が設立され、現在も合気道の中心的な組織として活動している。盛平翁の没後も、合気道は発展を続け、現在では世界 140 カ国以上で約 150 万人の愛好者がいる国際的な武道となっている。その発展には、盛平翁の息子である植芝吉祥丸（二代道主）の功績も大きく、組織の近代化や国際的な普及に尽力した。

盛平翁の直弟子には、斉藤守弘、塩田剛三、富木謙治、西尾昭二、藤平光一などがいて、合気道の発展に大きく貢献した。盛平翁の合気道観は複雑で、弟子たちが均質に理解するのは困難であった。そのため、弟子たちは独自の考えで合気道を実践し、流派は存在しないが、実際には異なる合気道観が存在している。その中で、西尾昭二（1927-2005 年、青森県出身）は、柔道や空手などを学んだ後、1952 年に合気道を学び始め、後に実戦性の高い合気道を追求した。ヨーロッパやアメリカなどでも指導を行い、国内外で高く評価されている。

5. 現代における合気道

合気道は、武道としての側面だけでなく、健康法や護身術、あるいは精神的な鍛錬法としても注目されている。その稽古は、老若男女を問わず、誰でも行うことができ、体力や運動に自信がない人でも自分のペースで無理なく続けることができる。また、稽古を通じて、礼儀作法や相手を尊重する心を養うことも大事である。技の修得だけでなく、人間としての成長や平和な社会の実現を目指すという盛平翁の精神を受け継ぎながら発展を続けている。伝統を継承しつつ、合気道の理念を広めるため、次世代への継承が重要な課題となっている。